

生ける水

聖霊による刷新のために

起きよ、光を放て、聖霊によって

全国コムニオ奉仕会 コーディネーター 小熊晴代

人生の最初の19年を富山県高岡市で過ご

した私にとって、分厚く濃灰色の雲に覆われた空とそこから降りてくるぼた雪が冬の原風景です。ですから、その2倍の年数を太平洋側で過ごした今でも、頭上に広がる冬の青空と穏やかな陽射しが当たり前とは思えず、不思議です。元旦の午後もそう思いつつ、彼方の空では爆弾が飛んでくるウクライナや聖地に住む人々の恐怖と苦しみはいかばかりかと思いつながらお祈り散歩をしていたら、スマホから警報音が鳴りました。立ち止まって緊急地震速報を読んでいると、足元でぐらぐらする揺れを感じました。自宅周辺は震度3。震度5強だった郷里で一人暮らしの92歳の父に電話すると、同市内に住む弟が出ました。本棚や仏壇から落下物があったけど父も弟家族も無事、父宅で倒れた灯油缶からこぼれた灯油を拭いている、とのこと。父は、たびたび余震があるので落ち着かない、今まで生きてきて初めての体験だ、と言いました。元旦の夜、テレビ各局の娯楽番組ほとんどが中止され、能登半島の地震と津波についての報道が続ききました。何が大切なのか、誰に目を向けるべきか、選択を迫られていると感

じました。

犠牲者の数が増えていき、被災者の窮状が刻々と明らかになる中で迎えた7日、『主の公現』のミサで、主の御言葉が心に響きました。「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は登り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる」(イザヤ6:1-2)。暗黒の中で私たちが起きて光を放てるのは、自分では放つことのできない光、神の光がイエス・キリストの十字架の勝利を通して私たちの内に来たからです。イザヤは主の栄光が「あなたの上に」輝くと言いますが、「今や、^霊闇が全くない神ご自身(一ヨハネ1:5参照)が「私たちの内に」住んでおられます。この「力と愛と思慮分別の霊」(二テモテ1:7)によって今年も日々起き上がり、地を覆う闇の中で復活されたキリストの光を放ちましょう。そして、今回の地震で命を落とされた方々に主の永遠の贖いを祈り、被災された方々に物心両面で必要な支援が速やかに届くよう祈りかつ行動しましょう。

☆ 目 次 ☆

巻頭言・起きよ、光を放て、聖霊によって	1
第1回カリス総会の報告(小熊晴代)	2
第3回聖霊刷新ユース黙想会の報告と証し (神保 恵)	5
黙想会に奉仕者として参加して(秋元伸介)	6
四年ぶりに東北大会開かれる(小野照子)	7
石川直樹師による全国8地区での黙想会 (小松多佳子)	9
エリジオ大塚敬介さんを偲んで(松村裕子)	11
ヨキエル神父(イエズス会)主のみもとに	12

発行

聖霊による刷新

全国委員会

編集委員

中村友太郎
益田 薫

購読料(送料込み・年1600円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021
東京都品川区上大崎2丁目
10-34-2-312

聖霊による刷新全国委員会

Email: ikerumizu.livingwater@gmail.com

郵便振替 00190-1-18878

口座名 聖霊による刷新全国委員会

からし種のように、パン種のように

― 第一回カリス総会が開催されました ―

全国コムニオ奉仕会コーディネーター 小熊晴代

昨秋10月29日午前、ローマで約1カ月にわたり開催されたシノドス第一会期が閉会ミサをもって終了しました。同日午後、シノドスの食卓からこぼれ落ちた祝福のパン屑をさっそく少しも無駄にならないように集めるかのように、バチカンから3キロ西にある教皇庁立マリア・マリーテル・エクレジエ国際神学院で、カリス（カトリックカリスマ刷新国際奉仕会）の総会が始まりました。たびたびお伝えしたように、カリスは二〇一九年、教皇フランシスコの勧告に従い、50年に及ぶカトリックカリスマ刷新という恵みの潮流から生まれた二つの国際奉仕団体が統合され、当時の信徒・家庭・いのちの部署（現いのち・信徒・家庭省）の管轄下で公法人格を有する単一組織として新規に発足

しました。活動開始の際、代表であるモデレーターと国際コムニオ奉仕会のメンバーは3年の任期で教皇フランシスコから指名されました。二〇二二年に予定されていた第一回総会でカリス自身の規約に従って次期モデレーターと国際コムニオ奉仕会のメンバーが選出されるはずでしたが、コロナ禍のため1年延期されての開催となりました。日本を含む世界70カ国から全国コムニオ奉仕会やミニストリーの代表が参加し、賛美と感謝と識別の三日間を共に過ごしました。

10月29日（日）午後6時、総会に聖霊が注ぎ出されるように賛美と祈りで開始。夕食後、モデレーターのピノ・スカフーロ氏の挨拶と総会全体の流れについて説明がありました。教皇フランシスコから開催に際して送られた祝福と励ましの手紙も紹介されました。

10月30日（月）午前。賛美と祈りに続いて、カトリック聖霊による刷新を通して聖霊がどのように働いておられるか、各大陸コムニオ奉仕会から報告されました。自然災害や内戦や政情不安に苦しむアフリカや南米諸国、世俗化に直面するヨーロッパ、と地を覆う闇の中で、聖霊はユースの創造的な活動や執り成しの祈りのネットワークを通して光を放っておられると感じました。アジア・オセアニア大陸の報告担当者は、西から東まで多様な文化と言語から成る各国の実情を動画で手際よく紹介。日本からは事前にオンラインの50周年記念全国大会やセミナー『聖霊に生きる』について文書

のみで伝えてあったのですが、長崎の浦上教会など日本の教会をイメージしやすい画像を何枚か取り込んでくださったって、感謝でした。正午にはラニエロ・カンタラメツサ枢機卿主司式司教4人を含む20人強の司祭と助祭団が赤い祭服に身を包んで聖霊降臨のミサを祝いました。午後は参加者が言語別グループで分かち合いをしました。私が参加した英語グループには20人が集まり、各自が聖霊による洗礼の普及、ユースのリーダーシップなど6つのトピックから一つ選び、2分以内で話します。時間制限のため一人一人の話に他の全員が耳を傾けて一巡しただけで終わりましたが、決してバラバラではなく、後から話す人が最初に聞いた分かち合いを思い巡らしながら内容に広がり、聖霊の働きを感じました。

続いて、投票によるモデレーターの選出がありました。3人の候補者、現モデレーターのピノ・スカフーロ氏（アルゼンチ

総会参加者から祈りを受けている国際コムニオ奉仕会の新メンバー。



2019年リーダー研修会参加者と再会。
現在は左からウガンダ、日本、セーシェル、
クロアチアのコーディネーター。

会場となった神学院の保護聖人、
「教会の母マリア」



ン)、シリル・ジョン氏(インド)、アンドレ・アランゴ氏(米国)の中から、数回の投票後に過半数票を獲得したスカフーロ氏が選ばれ、続投することになりました。

10月31日(月)最終日の午前には、①ミニストリー、②司祭・修道者、③共同体、④教皇庁認可の信徒団体、⑤青年、の5分野の代表が選ばれました。今回選出されたモデレーターと5分野の代表が、すでに選ばれていた各大陸コムニオ奉仕会の代表に加わり、新しい国際コムニオ奉仕会が発足しました。正午に、いのち・信徒・家庭省の長官、ケビン・ファレル枢機卿主司式によるミサで総会は閉会しました。

当日の年間第30火曜日の福音朗読、ルカ13・18〜21を解き明かされたファレル枢機卿の説教の要旨は次のようなものでした。

「イエスの言葉は人間の狭い視野を広げます。他人に認められたい、成功したい、努力の結果をすぐ見たい、と願う私たち

に、イエスは言われます。隠されたままでいなさい。急がず、忍耐強くありなさい。確信をもつて待ちなさい。

イエスは神の国を二つの行いにたとえられます。庭を耕す男と家で食べ物を用意する女は、全人類の代表です。また、神が世に現される御業も象徴しています。神は御子を遣わすことによって、世に小さな種を蒔き、人類という生地にわずかなパン種を混ぜられました。イエスの働きは、ひっそり始まる小さな種です。幼子のような人々に入り、注目されません。少量のパン種のように神の言葉を受け入れる人々の心の中でゆっくり成長します。しかし、神から生まれたものは驚くべき力を発揮します。小さな種が空の鳥を迎える大木になり、わずかなパン種が50kgもの小麦粉生地を膨らませ、数百人を養うパンになります。

洗礼を受けた信者一人一人の心の中に隠され、目に見えず、人間社会でキリスト者共同体が息づく時でさえ、隠され、見えなままです。しかし、それは人々と社会に偉大なことをもたらす力を持っています。神は押し付けも強要もなさいません。神は小さく取るに足らないものを愛されます。この救いの業が成熟し、人々の心と社会の中に隠されて「内側から」神秘的に働くことこそ、神の望みです。ですから、忍耐は大切です。種が発芽し成長するには時間がかかり、パン種が生地全体を変化させるには時間が必要です。最初は消えて死んだように見えるかもしれませんが、絶望することはありません。効果は少しずつ現れます。神の御業にも忍耐が必要です。神への信仰と明け渡しに満ちた忍耐があれば、神が聖霊によってゆっくりと驚異的な変容をもたらしてくださると私たちは固く信じることができます。人間一人一人が刷新され、神の子である本性が少し

ずつ現れてきます。社会は発酵して膨らみ、私たちはもつと和解除し、互いに親切になります。キリスト者は世に対して永遠の命の種、御国のパン種です。イエスが私たちの中で行動され、世界を変える力を私たちはイエスから受け取ります。ですから、落胆したり物事を早めようとしていたりしてはなりません。兄弟姉妹の皆さん、カトリック教会内でも聖霊による刷新は小さな種から始まりました。黙想会中に聖霊の新たな注ぎを体験した若い人たちの小さなグループから生まれ、今や何百万人もの命を救う豊かな恵みの潮流となりました。カリスも同じです。この奉仕の組織も今は御国に蒔かれた小さな種にすぎませんが、主は全てを整えて枝葉を広げる実り豊かな木にしてください。教皇様が示された目標に従って、教会の全ての人と聖霊による洗礼を分かち合い、教会の一致とエキクメニカルな歩みに奉仕し、心身において貧しい人々を助けましょう。この

ようにして、カリスはカトリック聖霊による刷新の使命に奉仕し、多くの人々がイエスの内にも教会の内にも聖なる召命に従って生きることのできる安全な巣を見いだせるよう助けるのです。

主が常に皆さんの歩みを導き、皆さんが聖霊の内に交わり（コムニオ）を保ち、神の国の成長のために喜んで協力できるように助けてくださいますように。アーメン。」

カリスの一部分である私たちが、主を「畏れつつも喜びに輝き」（イザヤ6・5）ながら忍耐と期待の賜物を大切にし、聖霊と共に大きな実りをもたらす小さな種を蒔き続け、生地全体をくまなく発酵させる一握りのパン種を粉に混ぜ入れ、キリストの体のあらゆる部分と心を合わせて神の国を完成させる協働者でありますように。アーメン、アレルヤ！

第三回聖霊による刷新ユース黙想会の報告と証し

東京 ヤコブ神保恵

去る三月の第二回に続いて、11月24日～26日まで第三回ユース黙想会が開催されました。今回の参加者は二十名を超え、それぞれに喜び、癒しや照らしがありました。奉仕者も回数を重ねて、聖霊によって強められ、与えられた賜物によって奉仕ができることに感動もしています。これまでの三回の黙想会で、私たちは聖霊からの新しい息吹を感じています。また、それと同

時に、私たちは日々霊的な戦いの中にいることを知っています。

「終わりに当たって言います。

主に結ばれ、その力強い威力にあずかって強くなりなさい。悪魔のまやかしに対してしっかりと立つことができるように、神が与えて下さる武器を身につけなさい。なぜなら、私たちに

とって戦いとは、血と肉からなる人間相手のものではなく、支配

の霊や権威の霊に対するもの、いわば、この闇の世界の権力者たちに対するものであり、天の者たちの間にいる、邪悪な霊的存在に対してのものだからです。」(エフエソ6・10-12)

そこで私たちはプログラムの始まりに「保護の祈り」を祈ることにしました。私にとっても個人的に「保護の祈り」や「大天使ミカエルの祈り」を日々祈る事の大切さに気づかされる黙想会になりました。

【黙想会後の証しから】

修道会に入って直ぐくらいだったと思います。私は右手首にシコリがあるのに気付きました。悪性ではないものの、ガンダリオンと言われるものらしく、出来た位置がとても悪く、手を曲げることが出来なくなり、春や冬の季節の変わり目や寒い日は痛みで泣くこともありました。

サポーターを付けて動かないようにしたりしていました。7年近く治らず酷くなる一方でした。手術をしてそのシコリを取り除こうと考えていました。

あの十月の第一回黙想会の後、十一月頃だったと思います。友達の家へ遊びに行き、その中はヒールの靴を履いていたのに、暗い中慣れない階段を降りていました。盛大に転んで、足首を思い切り捻じってしまい、一か月近くまともに歩けませんでした。だから、気が付かなかったのです！ 足が治って喜んでいたら時に、ふと気づきました。あれ？ 私の手首のシコリがない。自由に曲げられるし痛くもない。この時期、痛みでどうにかなくなってしまうような筈なのに、痛くないのです。綺麗にシコリがなくなつて、未だに再発していません。痛みもありません！

思い起こしてみると、私の心の中には色々な恨みや憎しみ(人種差別のような言葉や信頼していたのに裏切られという思い、また日本に帰ってきて、これら



の出来事を軽んじられたと感じたことなど）が一杯でした。実際、今は思っていないまでも、当時の私は修道院に対して、人々に対してそう思っていました。私の人生を滅茶苦茶にしたという感じ、辛くて苦しかったから、恨んでいい、憎んでもいいと思っていたのかも知れません。それでも、神様はそれを一気に払いのけ、私に明るい世界を見せてくれたと同時に、このように

素敵な癒しをくださいました。

今は、神様に感謝以外の言葉が見つかりません！ 共に祈ってくださいだった皆さん、ありがとうございます！ このユースの仲間に出会えたことに感謝します！ 私の考えを遙かに超える神様の素晴らしさに感謝します。私のために、これからもどうぞ祈ってください。私も皆さんのために祈らせていただきます。（菊地彩衣）
神に感謝！！！！

「ユース黙想会」に奉仕者として参加して

名古屋 秋元 伸介

昨年11月24日（金）から26日（日）に開催された第3回聖霊による刷新ユース黙想会に、三日目の朝の賛美とそれに続く講話を依頼され25日（土）の昼から26日（日）の最終日まで参加しました。

◆会場に到着したときは、ちょうど暮林神父様による賛美とユースグループの証の始まるころでした。名古屋で大学生を中心にアルファ・コースをオンラ

なわれる聖霊の満たしの祈りの準備の講話、赦しの秘跡、ミサ

があり、夕食を挟んで、聖体顕示、賛美、聖霊の満たしと言う流れでした。満たしは暮林師が御聖体によって、一人一人を祝福して行なわれましたが、按手の際にはユースグループが補佐しながら、祈りました。その間、ユースのメンバーに与えられた霊の賜物をとて上手く用いていました。一人の賜物に頼るのではなく、まさにチームで預言、ビジョン、知識の言葉の賜物を用いられていました。

満たしの祈りの後、茶話会、そして就寝となりました。翌朝はユース黙想会のスタッフは早起きし、その日の予定について、準備の祈りをしました。ここでも各メンバーが自由に聖霊から受けた促しによって祈り、またいただいた預言の言葉やビジョンを分かち合い、識別しながら祈り続けました。

◆朝食を終えて、私の担当する賛美の時間が来て、賛美のうち

めました。テーマは「聖霊の賜物と霊の働きの見分け」について

でした。聖霊の賜物については聖書、特に新約聖書の使徒言行録やコリントの信徒への手紙を基に話しました。霊の賜物の与えられた目的を、Iコリント12章7節「一人一人に、霊の働きが現われるのは、全体の益となるためです。」という言葉、霊の賜物の働きの解説はIコリント12章8節から11節にあるパウロの言葉を引用しながら説明しました。その中で、前晩の聖霊の満たしの際の賜物を用いてのチームワークのことも言及しました。ユースのメンバーたちは各々、普通に教会生活、社会生活を送っている日常的に見かける青年たちです。弱さも個性も欠点もあるでしょうが、聖霊による一致の内に、彼らは主の器、道具として主の御手の中にあり、聖霊は自由にその御力を表すのです。

霊の識別については、やはりIコリント12章10節に挙げられ、またIヨハネ4章1から3節に

ある言葉を基に説明しました。具体的には英国の説教者のスミス・ウイグルワースの著書引用しながら、具体的な例を、自分の経験も交えながら、話しました。

最後に、現教皇フランシスコ

☆賛美の歌声☆

四年振りに東北の空に

仙台・元寺小路教会 小野照子

「第四十三回東北大会」はこれまでとは一変した形で私達に与えられました。例年東北大会の会場として利用してきた施設がコロナ禍の影響を受け閉館となり、会場探しからの準備を余儀なくされましたが、幸い善き牧者修道院のご厚意により養護施設のホールを会場に開催することができました。講師にはエルサルバドルで司牧されているピラールの聖母修道会司祭の石川直樹神父様をお迎えし、十月二十一日から二十三日の三日間、秋晴れの好天に恵まれ札幌、秋田、山形、新潟、東京、千葉、名古屋などから延べ百名の参加

の言葉「聖霊はイエスがわたしたちの間におられることを思い出させ、あらゆる時代と場所の信者たちにキリストと出会う機会を開かれた。」(二〇二一年三月)を引用し、聖霊こそが福音を宣べ伝えるために、私たち

を、教会を力づけるお方であるということをお分かち合って、講話を終えました。二日間だけの参加でしたが、ユースグループのメンバーたちの姿に、日本の教会の将来の希望の光を見いだした思いでした。

者を得て心からの賛美の歌を捧げ、石川神父様のご聖体による力強い祈りと講話から「今、私達一人ひとりの祈りがとても大切である」との思いを胸いっぱいを受けて、盛会の内に終えることができました。

日に意識を失って転倒し、脳に血腫ができ、持病の腰痛がとても辛そうでしたが、母と父と私3人で思いがけず、大会へ日帰り参加ができることになりました。

新しい命―永遠の命のために
今をどう生きるか―

習志野教会 山田路子

大会スタッフの母が3日間宿泊参加できるように、私は、実家で父と留守番をしていました。ところが、初日の夕方、母が「パソコンのコードを忘れた」と、戻ってきました。母は、8月7

でまず家よりも職場を優先していました。三男の学費のための貯金の目標を達成したのに、仕事を辞めることができず嫌んでした。これからどうすべきかと祈り始めていました。

私が、この大会で最も印象深く心に刻んだこと、それは、日に何度も無意識に心の中で不平を言い、実際に家庭で愚痴を言う時、たとえそれが、どんなに小さなものであったとしても、それは悪霊からくるもの、悪を立ち入らせないためには、祈るしかないことです。悩み、不安、不平に心を向けるのではなく、祈ること、それは、頭で分かっているでも実際に行うには難しく、霊的な戦いです。「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」(エフェソ6・10) 神父様は、「絶えず祈ること、祈り続けることは義務」「聖霊のおられるところに、悪は退散するしかないこと」「どのような時も根気



よく祈り続けること」「聖性のために必要なことは祈りの生活」と話されました。そして「イエス様はまことの神」と耳にした時、心の底から、「まことの神」を知っていることに対して喜びが溢れました。まるで、真実と初めて対面したようでした。まことの神であられる方が、聖霊により、ご聖体により、私のうちにおられるのですが「私の自由を、神様自身も触れることはできない」からこそ、「祈りは、趣味ではなく、やってもやらなくてもいいものではない、

祈りは、命。祈りは、『非常に非常に非常に大切。』時間あるなしは、問題ではない。」と話されました。真理を知っていることと、真理のうちに生きることの違いに気づきました。大会後、「人によく思われたい」とつい相手に合わせてしまう私が、11月に退職することができました。大会では、父が何年も前に歌っていた賛美歌を、二十年来、音楽奉仕をされているオルガニスト山田早苗さん、バイオリンニスト奥田慶子さんの伴奏に合わせ心から喜んで歌っていることに感動しました。

神父様は大天使聖ミカエルのチャプレットで毎日祈られていくそうです。この祈りを唱える人には、ご聖体に近づくとき、9位階それぞれから選ばれた天使が付き添うこと、また、毎日祈る人には、生涯を通じてすべての天使が助け続けることを聖ミカエルが、カルメル会修道女に約束し、この祈りは教皇ピウス9世より認可されています。

神父様の講話より。「イエス様はここにいます、復活してもう死にません、あなたはいつか死にます、でも死の恐怖はあなたを襲いませぬ、あなたは、福音の中の、マグダレナであったり、ペトロであったり、アンドレアであったり、あなたも聖書の中に入っています、イエス様は誰がどんなものを必要かよく知っています。これは、信仰の問題、だからイエス様をお願いしてください。イエス様ができたことは、今ここでも可能です。」

「聖人は皆祈りの人、福音書全体は祈り。祈るか祈らないかは、天国に行けるか行けないかと言うこと。10分・30分祈っただけで、テレビ、YouTubeを見て、それは祈りではない。好きなことは、何時間でもするでしょう。どれだけの時間を神様に渡していただけますか？」「祈りは対話から始まる。祈り方がわからないと祈らなければ、天国に行きたくないと言っているのと同じ。時間私のものではない、神様から借りたもの。世間の雑音、悪

魔の雑音、私の雑音があると、聖霊様は聞きたくても聞けない」「一人ひとり神様の前に立ちます。信仰の旅。巡礼です。沢山のテストがあります。試験、誘惑、試験があります。それをパスする人だけが、イエス様の国に入れます。神の国は近づいた。イエス様がここにおられます。神様の国とは、イエス様のことを言っています。あなたの中にもう生きていくから。ご聖体を頂いた後、神様との一対一の関係がすごく大切になります。必要です。時間を割いて自分の時間を神様に与えること、犠牲です。これが祈りです。普通の人はそうしません。沢山の喜びがありすぎてあります。どれいどいちはばん大切なことはやらない。」「イエス様はあなたを見ている。あなたが、目をそらした時、悪魔は攻撃しますよ。あなたがイエス様を見なくなった時あなたは溺れるかもしれない。ペトロが湖の上を歩いたのはイエス様を見ていたから」「信仰を持っていく人は聖人です、正

しい人は信仰によって生きる。ダビデの王様、私たちを憐れんでください。私たちは、罪人です。汚れたものです。イエス様あなたの力が必要です。あなた

なしには生きられない。この世に何も素晴らしいものはない。神様との時間が足りない時、私の時間は死んでしまいます。イエス様、手を広げてください、

あなたの手を伸ばしてください、聖霊様見えなくても、ここにきておられます。聖霊様手を伸ばして按手してください。一人一人あなたの子供たちに。」

石川直樹神父の日本全国8地区での黙想会

(二〇一三年十月二日〜十一月十二日)を振り返って

東京 小松 多佳子

前年に引き続き、エルサルバドルで司牧されているピラールの聖母宣教会の石川神父様の一時帰国に合わせて、全国8地区で黙想会が行われました。今回は

的な雰囲気が必要なので賛美チームは欠かせないものでした。各地区の賛美チームの皆様にご挨拶いたします。

頂きました。二か所目は秋田教会で二十数名の参加者でした。二日間でしたが、秋田地区の奉仕者のご配慮で、希望者は二日目に聖体奉仕会への訪問もできました。秋田の参加者より私宛のお便りに

会への承認または許可のもとに行われました。このように手順を踏んでできたことは良かったと思っています。

最初は、仙台の聖霊刷新東北大会（三日間、善き牧者修道院）で三十数名の参加者でした。講話のテーマは「新しい命 永遠の命のために今をどう生きるか」でした。まとめとして、「瞬間、瞬間、自分の肉の欲望を捨て、祈り、聖書のみことば、聖霊により神の子として生きる」でした。聖霊刷新の大会で石川神父様をお招きすることは初めてでしたが、石川神父様から「聖霊の豊かな恵みに祝福された大会となりました」との言葉を

「心の癒しと解放を感じました」とありました。石川神父様からは「秋田でも神の恵みは寛大で感謝のうちに終わりました」との報告を頂きました。

地区にとつて多少の差はありますが、ゆるしの秘跡、ロザリオの祈り、賛美、講話、ミサ、ご聖体を顕示しての祈り、ご聖体による個人への祈り、希望者には按手の祈りがありました。

三か所目は、名古屋の南山教会の二日間で、一日目は25名、二日目は26名の参加者でした。この南山教会の集いはもう二回目でしたが、前年に引き続き南山教会と主任神父様に良い影響があったようだ」と、世話役の秋

元伸介さんからお聞きしました。秋元さんの報告では、「二日目は按手による個人の癒しの祈りがありました。これらは、石川神父様に全くお任せし、神父様が聖霊に促されるままにしていた頂きました。このようにすると、聖霊が神父様を通して、自由に力を表わしてくださいました。預言、ビジョンをいただきたい方もあり、神父様がそれらを分かち合っていて良いと言われて、その賜物の表われによる内容を聖書に基づき、解き明かしてくださいました。小教区で、しかも聖霊による刷新ということも言わず、黙想会の中で聖霊が自由に働かれ、神父様も、参加者に『異言の賜物をもたらした方は異言で祈ってください』とまではっきりと行ってくださいました。また、私は黙想会の一週間前から偏頭痛でしたが、黙想会の終わった翌日から、頭痛は全くありません。」

仙台と秋田では、個人面接で祈って欲しいことを伝え祈って頂くことができました。また、霊

四か所目は、鹿児島のカテド

ル教会と、二日目は始良教会で行われました。鹿児島のカテド

ラルでは四十名近く、翌日の始良教会では三十名ぐらいの参加でした。末吉卓也神父様からのお便りでは「ご聖体で個別に祝福する時、『顔を伏せないでイエス様を見てください』との、石川神父様のご指示に従ってしっかりとイエス様を見つめる皆さんの姿に感動しました。二日も皆さん、霊の次元を深く見詰めさせる神父様のお話に引き込まれ、感動していました」とありました。

五か所目は奄美の名瀬聖心教会で二日間、一日目は三十名、二日目は約二十五名でした。末吉卓也神父様によると、「奄美大島では、霊媒であるユタに頼る人がカトリック信者であつてもいるのですが、石川神父様は、イエスとユタの両方に聞くことはできないとして、祈りの中でユタをはっきりと退けられました。その宣言は、奄美の人々の救いに極めて大きなものだと思います。」

六か所目は福岡の笹丘教会の一日黙想会で、四十数名の参加

者でした。遠山満神父様が赴任された長崎から来てくださいました。聖霊による刷新福岡祈りの会よりの報告では、「ご聖体による一人ひとりの祝福に続いて癒しの必要な人は再度並んで、神父様の接手を受けました。癒され解放された方がおりました。今年もイエス様のご聖体にましますことを、石川神父様を通してしっかりと私たちの心にインプットされました。」

七か所目は熊本の本の帯山教会で、二日間三十名ぐらいの参加者でした。松山純子さんからの報告では、「石川神父様は聖霊の火を信徒の心に灯すチャッカマンのようでした。日常生活での祈りの時間が神様との信頼関係を築くのいかに大切かを思い出させてくれました。」

石川神父様が日本に來られた目的の一つは、日本を覆っている黒い覆いを取り除くためだそうです。日本人は信仰心はあるが、神様と対話する祈りをしない。黙想会に何回参加しても、霊的に成長しないのは、普段の

祈りの時間がないから。やはり、愛するイエスともっと時間を作り、イエスが語っていることを聞き取れるように静かに、聖体礼拝、聖体訪問をする必要性を感じた黙想会でした。黙想会に参加した後で良かったで終わるのではなく、実際にイエスと過ごす時間を増やそうと思いました。」

八か所目は、東京の神の御摂理修道女会で、二日間とも五十数名の参加者でした。ご聖体の個人への祝福と、個人への接手の祈りをして頂きました。最初の日は立ったまま接手して頂き、聖霊の安息に入られた方がおられました。二日目は、椅子に座って接手して頂きました。涙を流し泣く方などおられ、心の癒しがあったと思います。

今回の黙想会で感じたことは、「イエス様と繋がって欲しい」という石川神父様の真剣な思いです。石川神父様は「イエス様と繋がるためには、絶えず『主よ、憐れみたまえ』など好きな聖書の言葉で良いから、絶え間

なく祈ることが必要」だと言われていました。

イエス様と共に歩み力を頂くためには、貴重な時間をイエス様に捧げることなのだと思います。日本を覆っている黒い覆いを取り除くために、日本に石川神父様を送って下さった神様に感謝。日本にリバイバルが起きますように！ 来年も石川神父様に来て頂けるよう、皆様どうぞお祈りをお願い致します。

CCRのMLにてご案内しましたが、次回、石川直樹神父様のズーム黙想会を、二〇二四年二月十二日（月）振替休日11時～13時に行います。問い合わせは小松多佳子へ
takakoma36@gmail.com
〇八〇一五五三〇一四五六四
(20時30分まで)

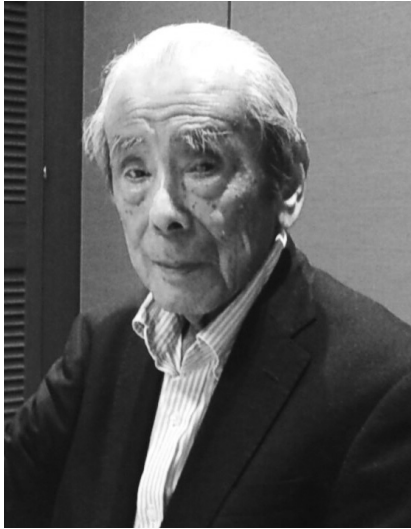
なお、今までの石川直樹神父様がZoom黙想会No.2～No.8までがYouTubeで視聴できます。DVDとCDも作成しました。一つ八百円（送料別）です。ご希望の方は上記問い合わせ先まで。

エリジオ大塚敬介さん（一九二四年六月一九日）

二〇二三年二〇月二〇日（を偲んで）

昨年10月14日に、わが国の聖霊による刷新の発端（一九七二年）からのメンバーであり、また中心的なリーダーとして貢献してこられた同氏の葬儀ミサ・告別式が永年の所属教会である東京・初台教会で行われました。ここでは、一人の方の親しい交わりを介して、ともに振り返り感謝をささげたいと思います。

『私が四谷の集いに通いだしたのは、受洗から一年ほどの、一九九六年でした。周りに信者が



いなくて、信仰をもって生きるとは、どういうことなのかと模索していた時期でした。集いは、上智大学の十三階で行われ、マシー神父様をはじめ、大勢の人々が、二重三重に円になり、皆一つになって大きな賛美を挙げていました。賛美の中に神様の臨在を感じ、神様と生きている人々と出会う心が喜びでいっぱいになったことをよく覚えています。私もここにいて、神様と親しく生きていきたいと思えました。その中心メンバーとして活躍しておられたのが大塚さんでした。

大塚さんは毎日曜日の賛美をほとんどお休みすることなく、集いに行けば、いつも笑顔で迎えてくださいました。いつもお会いできる安心感ある存在でした。そして四谷の集い

がうまくいくように、いつも様々な気にかけてくださる、集いの長老的存在でした。集いで二十数年一緒に過ごし、言葉でも言外でも教えていただいたことが沢山ありました。

大塚さんは、度々、「携帯電話話」の話しをしました。私たちは神様と直通的「携帯電話」を持つていて、神様と直接話ができるという内容です。「何でも、神様に話したらよいのです。神様に聞いたら、応えが返ってきますよ。」そう話す大塚さんから、私は、いつも生き生きとした信仰を感じました。この恵みができるだけ多くの人に与えられるようにとの思いを常々もっておられたと思います。「聖霊セミナー」の開催や、刷新の大会を大切にしていました。

大塚さんは、賛美が大好きだったと思います。賛美リーダーの時には「♪主よ、あなたを賛

美したい」をよく歌いました。「空の鳥は神に向かい、神の力を賛美している・・・」とありますが、「この歌を歌うと、海外

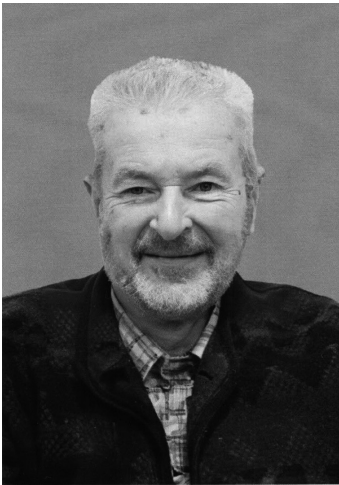
の教会のミサを思い出します。聖体拝領の時になるとどこからか小鳥が入ってきて、教会中を飛び回るのですよ。鳥たちも一緒に賛美しているんです。」と、話されました。大塚さんが集いで話される預言を聞いて、力付ければ、励まされる体験を何度もしました。特に、私たちを励まし、包んでくださるニュアンスは、大塚さんと主の交わりから伝えられたものと感じていました。

小教区の教会委員長を務めていた大塚さんは、初台教会の建て替えにも尽力されてきました。教会が完成した時の喜びは一塩だったと思います。真新しい教会を案内していただいたことも、私の大切な思い出です。特に舟越氏の十字架の道行きがここに來ることになった経緯や、作品のサイズが初台教会の大きさにぴったりだったことをお話し

ヨキエル神父・主のみもとへ

イエズス会のハインリヒ・ヨキエル神父様が旧年十二月二十六日に主のみもとに九十八歳で召され、同月二十九日に東京の聖イグナチオ教会にて葬儀ミサと告別式が行われました。告別のカードに選ばれた言葉「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」

(イザヤ6・8) どおり、いつも祈りの奉仕にご尽力くださった神父様のために、ご冥福をお祈りいたしましょう。



P. Heinrich Jokiel, S.J.
ハインリヒ・ヨキエル神父
1925~2023



略歴：

1925年6月26日	ドイツのナイセに生まれる
1945年9月17日	イエズス会入会
1950年8月22日	来日
1957年3月24日	司祭叙階（東京）
1967~2001年	山口と大分で司牧活動
2001~2005年	恵みの丘チャプレン（長崎）
2005~2022年	上石神井修道院で司牧活動
2022年6月~	ロヨラハウスでヘルス・ケア
2023年12月26日	帰天（ロヨラハウス）

ございました。「主のご計画には間違えがない。主がなんでもお計らいくださる」と笑顔で仰っていました。

クリスマスには、ご自宅に招かれて、クリスマスの飾りをさせてもらったのも懐かしい思い出です。庭木にクリスマスイルミネーションを施すため、

堀に上り、電信柱に掴まりながらの作業でしたが、完成すると寒い季節にキラキラと輝いて、とてもきれいでした。大塚さん宅のイルミネーションは、地域の人達にとっても、無くてはならないものだとお聞きしました。その後、奥様が美味しいデザインを振舞ってくださいましたが、

クリスマスを迎える家族団欒に与ったように温かく楽しい思い出です。得難い時間を頂いたことをあらためて感謝しています。いつでもお会いできると思っていた大塚さんでしたが、天寿を迎えられました。天国では最愛の奥様や信仰を共にした仲間と再会し、あの満面の笑顔で過

ごされていることでしょう。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことについても感謝しなさい」のご葬儀の時のみ言葉は、大塚さんにびつたりと感じました。後に従う私も、そうありたいと切に希望いたします。』

（川口教会・松村裕子）